ソーシャル＆エコ・マガジン　人を呼び込み、一緒に地域を盛り上げていく！「地域のアートと音楽フェスティバル」の大特集！

ソトコト

No.231
SOTOKOTO
9
September 2018
823YEN

地域のアートと音楽フェスティバル

Fes ガイド

Local Art & Music Festival Guide

手づくり感ある
ローカル・フェスティバル・ガイド40

Local Art & Music Festival Guide

『トッピングイースト』の音楽プロジェクト。義太夫あり、家電楽器あり、歴史を見つめ直すリサーチあり。

©豊島

舞台はイーストトーキョー。

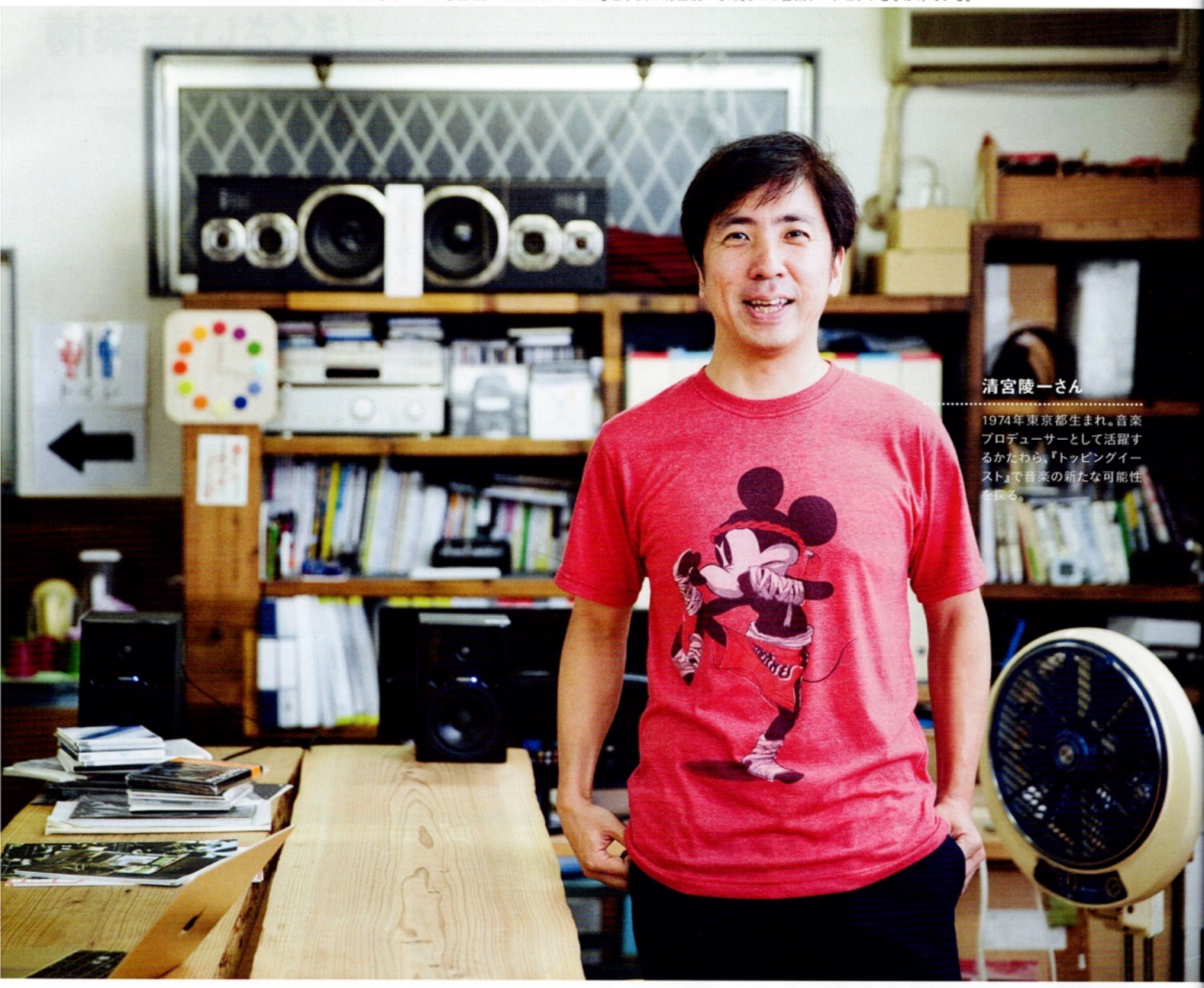
を広げる、『トッピングイースト』。

音楽を楽しむ「場」が少ない東京の東側。そう感じた墨田区在住の清宮陵一さんは、仲間に声をかけ、
「ほくさい音楽博」という地域密着型の音楽プロジェクトを開催。それを皮切りに、現在、まったく異なる3つのプロジェクトを実験中!

photographs by Hiroshi Takaoka　text by Kentaro Matsui

右／今年も開催する「ほくさい音楽博」の打ち合わせをするスタッフ。左／東京・本所にある『トッピングイースト』の活動拠点。

お気に入りのミッキーのバッタもんTシャツを着た、『トッピングイースト』理事長の清宮陵一さん。3つの音楽プロジェクトを手がけている。



清宮陵一さん

1974年東京都生まれ。音楽プロデューサーとして活躍するかたわら、『トッピングイースト』で音楽の新たな可能性を探る。

特集

地域の
アートと音楽フェスティバル・ガイド
LOCAL ART & MUSIC FESTIVAL GUIDE

音楽の可能性

プロジェクトの始まりは、酒の席のノリから！

隅田川、両国国技館、東京スカイツリー。新旧入り交じったまちの歴史と下町の風情を感じさせる東京の東側。なかでもコアな墨田区本所・両国界隈を拠点に音楽プロジェクトを展開しているのが、清宮陵一さんが理事長を務めるNPO法人『トッピングイースト』だ。

活動の始まりは、2010年。清宮さんが地元の仲間（その後、『トッピングイースト』の理事になる花井雅保さんと茂木紀子さん）とバーで飲んでいたときに、「何かやろうよ」と誘った。「何か」というのは、もちろん音楽。「バーの隣が鞄屋さんの倉庫でした。ライブスペースとして借りてコンサートをやろうと、酒の席のノリで」と笑顔で話す清宮さん。スティールパンの名手・原田芳宏さんと、地元のフラダンス教室を招き、「ほくさい音楽博」を開催した。「お年寄りや子どもが100人以上も来てくれて。うれしかったです」。

その充実感を味わって以来、地域密着型の音楽プロジェクトを続けている清宮さん。14年に『トッピングイースト』を設立し、東京アートポイント計画事業の支援を受けながら、今、まったく趣の異なる3つのプロジェクトを進行中だ。次のページで紹介しよう！

PROJECT 1

ほくさい音楽博

photographs by Takehiro Goto

❶義太夫の講師は竹本京之助さん。熱血指導で子どもたちと一緒に難しい「三番叟」に挑戦。衣装は理事の花井さんの私物。❷ガムランでは槍を持った踊りも披露。❸スティールパンを奏でる子どもたち。❹ウクレレを演奏する男の子。

子どもが自転車で練習に。地域密着型の音楽博!

2010年からスタート。14年からは東京都と共催し、「練習から発表まで」をコンセプトにした小学生限定のプログラムに。演奏するのは、トリニダード・トバゴのスティールパン、日本の義太夫、インドネシアのガムランなど多彩だ。

9月に墨田区内の小学校にチラシを配布し、参加者を募集。それぞれ十数名の小学生が講師に手ほどきを受けながら6回練習し、2月に回向院を中心とした両国周辺の会場で演奏を発表する。「実は初年度の義太夫の応募は0人。子どもたちにとって遠い音楽でしたが、今は人気のプログラムです」と清宮さん。音楽博の認知度も上がり、昨年は約2000人の観客が来場。「ほくさい」の名は、このあたりが葛飾北斎の生誕地だから。

スタッフのお母さん・お父さんに聞きました!

前川久美さん
墨田区錦糸町在住

墨田区に引っ越された方は、地元の住民と知り合いになれると安心されます。「ほくさい音楽博」もそんなつながりを生む場になっています。

桑原智之さん
墨田区緑在住

息子がスティールパンに参加。もう少し規模が大きくなれば、より多くの子どもが音楽を楽しむ機会が増えると思い、運営を手伝っています。

PROJECT 2

エレクトロニコス・ファンタスティコス!

地域の不用家電を回収し、楽器につくりかえてライブ!

アーティスト&ミュージシャンの和田永さんをリーダーに、使われなくなった家電を楽器に生まれ変わらせ、展示、体験、演奏する参加型のプログラム。2015年からスタート。不用となった家電を回収するところからはじめ、「『トッピングイースト』の活動拠点に、廃品回収業者かというほど大量の家電が届きました(笑)。使えそうなものから楽器をつくり、アサヒ・アートスクエアでコンサートを開きました」と清宮さん。

16年には「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」に招かれ、再び地域の人と家電回収から行い、日立市でライブを開催。17年は、楽器に変えた家電を供養する「電磁盆踊り」を東京タワーの下で行った。

photographs by Mao Yamamoto

❶楽器名は「釜鉾」。理髪店の「お釜ドライヤー」が光と音を放つ。❷ギターのように扇風機を持ち、演奏する「扇風琴」。光の明滅を音にしている。❸ブラウン管テレビから出る電磁波を素手でキャッチし、アンプから音を出す「ブラウン管ガムラン」。❹東京タワーで開催した「電磁盆踊り」。

PROJECT 3

BLOOMING EAST

学生や地域住民とフィールドワークを行い、公共空間における音の可能性を探ったコトリンゴさん。ハト、おじさん、カモメ、オノマトペなど要素に合わせて参加メンバーが音の素材をつくり、コトリンゴさんがサウンドトラックをプロデュースした。

著名な音楽家が、東東京の「昔と今」をリサーチ。

音楽家が、東東京を音楽の"舞台"にするために、リサーチと実践を行う。2016年からスタートし、初年度は作家でミュージシャンの寺尾紗穂さんが、八広と東墨田の歴史をたどった。社会福祉会館では、戦後この周辺地域を開拓した人々の歴史や、盛んだった皮革産業の話を聞き、閉鎖していたブリキのオモチャ工場でライブを行った。

17年はコトリンゴさんとともに、日本大学理工学部建築学科の学生と一般公募の参加者が東東京の音を採取し、浅草にある日本最古の地下街と隅田公園のサウンドトラックを制作。

そのほかにも、寺尾さんが戦災・震災孤児をテーマに、コムアイさんが外国人コミュニティをテーマにリサーチを行っている。

音楽って、もっと自由なはず。その可能性を探りたい。

紹介した3つの音楽プロジェクトをディレクションする清宮さん。実は、2010年まで大手音楽レーベルにディレクターとして勤め、今も自身が設立した『VINYLSOYUZ LLC』を通じて音楽産業に携わる音楽のプロだ。「レーベルにいた頃は、アーティストの年間スケジュールを立て、CDを出し、ライブを行い、グッズ販売も含めていくら売り上げるかということばかりを考えていました。そのスキームを単年度会計で繰り返す音楽ビジネスのあり方にだんだん息苦しさを感じてきたんです。音楽って、本来はもっと自由なはず。音楽の可能性を探りたくなり、自分が暮らす墨田区で地域と関わりながら音楽プロジェクトを始めようと仲間を誘いました」。

観客の投げ銭で行っていた「ほくさい音楽博」が軌道に乗り始めた12年には、東京スカイツリーが完成。開業イベントを主催する墨田区から出演依頼が舞い込んだので、「『スカイツリーの下で演奏した』って、大人になってから自慢できるよ」と地域の子どもたちに声をかけると50人ほどが集まり、男の子はスティールパン、女の子はダンスを練習し、ステージで披露した。「そのイベントが本当に楽しくて。『これが音楽だ!』と実感しました。そのときの『こんな音楽がやれたら』という思いが、現在の『ほくさい音楽博』につながっているのです」と、清宮さんは振り返る。

その「ほくさい音楽博」の特徴は、「練習から発表まで」が音楽博だということ。「練習場では、別の小学校から来た見知らぬ子どもたち同士が気持ちを合わせ、呼吸を合わせ、音を合わせて曲を完成させていく。音楽ならではの共同作業だと思います」と清宮さんは言う。例えば、ガムラン。同じ位置の鍵盤を叩いても音程が微妙にずれるように調整されている2台の鍵盤楽器を、ペアを組んだ2人が気持ちを合わせて同時に叩くことで、ゆらぎが生まれ、波のような美しい音を奏でる。義太夫では、講師の竹本京之助さんが、「空間を響かせよう」と指導する。楽譜を正しく演奏するのではなく、みんなで「声を響かせる」ことに重きを置くのだ。参加したばかりの子どもは人前で大声を張り上げるのを恥ずかしがるが、継続して参加している先輩の大声を聞き、「自分も」と頑張って声を出す姿が見られる。「そんなふうに、教科書的に教える先生ではなく、音楽を体感することを重視する本物の演奏家に会い、教えてもらえることも大きな魅力です」

親御さんや地域の人と、フラットな関係を築く。

和田永さんをリーダーとする「エレクトロニコス・ファンタスティコス!」も独自の進化を遂げている。ライブを開催するために、地域で家電を回収するところから始めるので、長く地域と関わることになる。今、東京、日立、京都で「ラボ」が立ち上がり、エンジニアやデザイナーをはじめ、多様な人たちが参加し、楽器づくりを楽しんでいる。生まれた家電の楽器はすでに17種類! 「ライブは和田さんが取り仕切りますが、ラボでの活動はみんなが自由に行い、自分たちの遊び場にしています。これほどまでに自由に広がっていくプロジェクトをつくれたのは初めてですね」と清宮さん。今年はオーストリアのアルス・エレクトロニカ・フェスティバルで受賞し、「ラボをつくってほしい」との依頼も来ている。「4か所目のラボは海外かも」と清宮さんも興奮気味だ。

3つのプロジェクトのなかでも、「BLOOMING EAST」は異質なかたちで展開している。東東京の歴史や現在の様相を音楽家がリサーチし、地域を"舞台化"するプロジェクトだが、「リサーチは続けていますが、最終的にどんな形に落とし込むかは不確定です。でも、それでいいと思っています。イベントやワークショップを目的としていないので」と、プロジェクトの向かう先は清宮さんにもわからない様子。今後の展開に注目しよう。

『トッピングイースト』のコアメンバー。

茂木紀子さん
ワールドミュージックの制作に携わっていたが、子育てとの両立が困難で退職。地元で活動。

花井雅保さん
ラジオ局『文化放送』の元・ディレクター。現在は音楽制作に携わっている。

村瀬朋桂さん
義太夫を練習する子どもたちの声に聞き惚れて、「仕事の手が止まってしまいます(笑)」。

鹿島一郎さん
釣具店『餌勝商店』店主。隅田川花火大会の夜に道端で清宮さんに熱く語られ、スタッフに。

一方で、演奏家やアーティストが、適正な収入を得られる仕組みを生み出すことも大切な課題だと清宮さんは考えている。「CDなどのパッケージが売れなくなり、音楽で食べていくのは難しい時代になりました。ライブが重要であることに変わりはありませんが、ワークショップという概念も拡大してきているし、公共放送も新たなメディアとして活用していけるのではと感じています。『トッピングイースト』のプログラムはそのための実験でもあります。エンタメ産業の枠に捉われず、社会のなかで音楽と音楽家が活躍できる場を広げていきたい」と清宮さんは音楽プロデューサーの顔を覗かせる。「でなければ、続かないかも。僕自身、音楽ビジネスで収入を得ながら『トッピングイースト』と両輪を回しています。それで心のバランスは取れているのですが、お金のバランスはなかなか」と苦笑いを浮かべた。

そんな現状を抱えながらもプロジェクトを続けていくために、『トッピングイースト』では今年から新しい取り組みを始めた。それは、「ほくさい音楽博」の運営に、参加した子どもたちの親がスタッフとして加わることだ。「『トッピングイースト』がプロジェクトを企画・運営して、親御さんや地域の方々がサポートするという図式ではなく、地域と"フラットな関係"を築きたいのです」と清宮さん。「フラットな関係は、地縁の濃い地方よりも、流入人口が多い都会のほうがつくりやすいかもしれません」。

『トッピングイースト』は東京都との共催が終了すると、予算の多くを占めるアートポイント計画事業の支援を受けられなくなる。「そうなったときに『ほくさい音楽博』がどうなっていくのか、とても楽しみです。もちろんさまざまな策は講じていますが、結局のところ地域のお祭りとして残すべきだと関わるみんなが本気で思ったら、残っていく。お祭りってそういうものですよね」と清宮さんはプロジェクトの進む先を見つめる。運営資金や地域との関わり方は、音楽プロジェクトを行う多くの団体に共通の課題に違いない。音楽の可能性を広げるためにも、地域住民の共感や企業のサポートがもっと広がることを期待したい。

49

祭

TOPPING EAST

東京都

理事長の清宮陵一さんに聞きました!

これからフェスを始めたいという人へ一言!
自分が住んでいる場所を会場に見立てると、おもしろい場所を発見したり濃いキャラに出会ったり、ワクワクが止まらなくなるはず!

DATA　活動団体名／トッピングイースト　スタート年／2014年　スタッフ数／8名　www.toppingeast.com

蔵前橋のたもと、隅田川沿いの花壇を手入れ。月曜と土曜の朝にスタッフやプロジェクト参加者が集まって水をやる。